

ミョウガの新病害 葉鞘褐色腐敗病(仮称)



図1 葉鞘褐色腐敗病の症状
左から初期、中期、末期症状

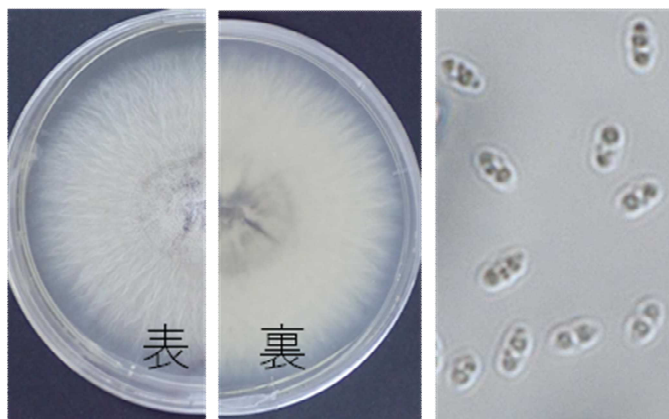


図2 病原菌の培地上での菌糸(左)と分生子(右)

農薬名	処理方法	希釈倍数	発病葉率
ベンレート水和剤	散布	2000	0% (0/8)
アミスター20フロアブル	灌注	2000	75% (6/8)
ダコニール1000	散布	1000	87.5% (7/8)
ボトキラー水和剤	散布	1000	87.5% (7/8)
ジーファイン水和剤	散布	750	100% (8/8)
無処理			87.5% (7/8)

表1 葉鞘褐色腐敗病への各農薬の効果

県内の施設ミョウガ産地では、以前から葉鞘(偽茎)が褐変、腐敗する障害が発生しており(図1)、原因を調査しました。障害株から複数の糸状菌が分離され、接種試験を行ったところ、*Musidium stromaticum*が原因菌と考えられました(図2)。この糸状菌によるミョウガでの病害は報告がなかったことから、日本植物病理学会において病名を葉鞘褐色腐敗病とすることを提案しました。なお、ショウガでは、この糸状菌は褐色しみ病の病原菌として報告されています。

現地調査の結果、本病害は高湿度条件で発生しやすいと考えられ、最初、下位葉を切除した傷口などから侵入した病原

菌が葉鞘の内側及び上下に進展し、葉鞘を腐敗させるものと考えられました。ミョウガは、急激に成長して葉鞘が肥大した場合、縦方向に割れる(亀裂を生じる)ことがあります。このような傷口がある葉鞘では病勢の進展が速くなる傾向が見られました。

薬効試験を行ったところ、ベンレート水和剤の効果が高いことが分かりましたので、今後、適用拡大に向けた試験を実施していきます(表1)。ミョウガでは以前から発生している原因不明の障害が他にもあり、今後も調査を続けていきます。

(病理担当 岡田知之 088-863-4915)